文章論と修辞学

林　四　郎

1　文章論と修辞学との分れがたいところ

文章論は文章に関する記述科学で、修辞学は文章の表現効果を高めるための技法の研究である――と言えば、そのちがいが極めてはっきりしているようであるが、実はその境は明瞭なものではない。あることを追求していて、それが文章論としてのことなのか、修辞学としてのことなのか、自分でわからなくなることが、このごろ、しばしば、ある。それを、無理にどちらかに判定してしまわないで、こんな場合は、どちらに属するのかわからぬということを述べてみたい。

2　先行文中の語の反復

文章中で、相接する2文の間に同じ語が用いられることが少くない。

文の連接形式を論ずることは、文章論中の重要な課題であるから、例えば後続文の中に先行文中の語が用いられる可能性が大きいと述べることは、文章論上の発言にちがいない。

しかし、修辞学は、昔から、先行文中の用語の効果的な反復法を、しきりに教えて来たのであるから、先行文中の語の反復ということは、修辞学上の発言でもあるのである。

ここで修辞学というのは、東洋の、すなわち、漢文でいう修辞学のことである。

漢文の修辞学は、随分豊富な内容をもっている。日本の江戸時代の漢学者たちも、大いにこれを学んだ。明治初期中期の刊行物から、その成果をうかがい知ることができる。その種の著作の中から、先行文中の語の反復に関する指摘の一つを取り上げてみよう。

明治14年に刊行された漢文修辞学の書に、結城顕彦著『文章叢話』(巣枝堂、和本三冊)というものがある。その中に「頂針」という一項があり、

頂針トハ頂針回環ノ略語ニテ、環ノ頂ニ針スレバ、回リテ旧ノ処ニ復スルト云意ナリ。都テ文章ハ歩ヲ踏ムトキハ、進ムニ苦労ナクシテ、文調ノ円活ナルモノナリ。

と説明されている。これだけでは何のことかわかりにくいが、これに、韓愈の文章「師説」から例を引き、

古之学者必有師。師者所以伝道授業解惑也。(古ノ学者ニハ必ズ師有リ。師ナル者ハ、道ヲ伝ヘ、業ヲ授ケ、惑ヒヲ解ク所以ナリ。)

(注) 訓読は、諸家の読みを勘案して林の定めたものを添える。以下同じ。

の部分について、

コレ師匠ナル者アリテ、其師匠ハ何ヲスルナレバ斯々ト歩ヲ進ムルニ苦労ナシ。

と解説している。つまり、「師」という語が「古之学者必有師。」という文の文末に置かれたかと思うと、直ちに「師者所以伝道...」と次の文の文頭に置かれ、これによって、文勢の進展が気付かぬうちにスムーズになされるということを言っているのである。この、前文末の語を後文の文頭で繰り返すことは、何のことはない、私たちのいう「尻取り」で、子どもの言葉遊びには、無くてならぬものになっている。

ところで、結城氏のこの説明では、「頂針」の意味は、前文末の一語と後文頭の一語とが一点に重なり、そこが「環」の頂上になって、回転の支点になることとして了解できるが、「回環」の「環」の意味が必ずしも明らかでない。

3 「頂針回環」ということ

頂針回環という言葉が中国のだれのどの書物に用いられているのか、私は、不勉強で、まだ知らないのであるが、日本の江戸時代の学者は、しきりに用いている。

頼山陽は、自分自身、大変な能文家であったし、文章批評家の雄でもあった。『唐宋八大家文読本』の全文章に山陽が評を加えた『増評唐宋八家文読本』(安政2年刊)というものがある。その巻一、韓愈「雑説四」の冒頭部分、

世有伯楽然後有千里馬。千里馬常有而伯楽不常有。(世ニ伯楽有リテ然ル後ニ千里ノ馬有リ。千里ノ馬ハ常ニ有レドモ、伯楽ハ常ニ有ラズ。)

に対して山陽は、次のように評を加える。

雲固不靈於竜竜乗此気有千里馬千里馬常有而伯楽不常有文之頂針回環一古定法

とある。これは、八家文読本でこの文章の直前に置かれる同じ作者の「雑説一」の文章の冒頭部と対比して、「頂針回環」を説いているのである。「雑説一」の前半は、(下線は筆者)

竜嘘気成雲。雲固弗靈於竜也。然竜乗是気茫洋窮乎玄間薄日月伏光景感震電神変化水下土汨陵谷。雲亦靈怪矣哉。(竜、気ヲ嘘ケバ雲ト成ル。雲ハ固ヨリ竜ヨリ靈ナラザルナリ。然レドモ、竜ハ是ノ気ニ乗リ、茫洋トシテ玄間ヲ窮メ、日月ニ薄(セマ)リ、光景ヲ伏シ、震電ヲ感ジ、変化ヲ神ニシ、下土ヲ水ニシ、陵谷ヲ汨(ヒタ)ス。雲モ亦靈怪ナルカナ。)

となっている。この下線を付した「竜」の、文末と文頭における重なりが、「千里馬」の同様な重なりとともに、頂針回環になっていて、これは古くからの一つの定法だというのである。山陽の評文を次のように読んでおく。

「雲固ヨリ竜ヨリ靈ナラズ。竜此ノ気ニ乗リ...」「千里ノ馬有リ。千里ノ馬ハ常ニ有レドモ伯楽ハ常ニ有ラズ。」ハ、文ノ頂針回環ニシテ、一ニ古ク定マレル法ナリ。

韓愈の「雑説」は、いずれも短い文章で、しかも変化の妙を極めた名文として古来有名なものである。2篇の文章はそのまま組みになって『文章軌範』の第5巻にも載っている。

文章軌範の注釈書には日本人の手になるものがたくさんあるが、中でも細田謙蔵氏の『文章軌範詳説』(大正6年、明治出版社、「漢文註釈全書」中の1冊)が、その名の通り「詳説」で、特に「文法」の解説がくわしい。漢文の世界で「文法」とは、修辞法のことである。この『詳説』で細田氏が採用したテキストは、本文、割注のほかに、所々、傍注を付している。傍注は、漢文のテキストでは、よく、文法の説明に当てられることがある。細田氏もその法に従い、先学諸家の指摘から適切なものを採って傍注とし、且つ、ひとくだりごとに「文法」の項目を設け、本当に詳細に解説を施している。

「雑説」の「一」「四」は、文章軌範では「上」「下」となっている。下の冒頭部の傍注に細田氏は「頂針回環与上文有変化」との評語を採用している。その「上文ト変化有リ」の意味を、

上文ハ竜雲雲竜ト書キ来リ、頂針回環ヲ為ス、此ノ文モ亦伯楽千里馬、千里馬伯楽ト書キ来リテ同法ナリ、然レドモ上文ハ二句ニシテ短シ、此ノ文ハ四句ニシテ長シ、此レ上文トノ変化ニシテ文法ノ緻密ナル所ナリ、

と説明する。

この説明から、「変化」が短句から長句への変化であることがわかるほかに、頂針回環が単に前文末の語の尻取り式使用だけを意味するのではないらしいことがわかる。反復使用される1語のほかに、それの相手となる語の相対位置が問題であるらしい。続いて細田氏は、

頂針回環ハ頂上ニ針ヲ建テ之レヲ回環スルノ意ニシテ重進回環ト同ジ

と言い、「重進回環」なる語を掲げている。

重進回環について、細田氏が詳細に説明しているのは、同じく韓愈の「諱弁」(第2巻にある)においてである。この文章は、「諱(いみな)」の習慣に対する反論をするもので、長上を尊敬することの現れとして、臣は君の、子は父の名を忌み避けて、同名を用いないのは勿論、同音の名すら避けるべきであるという議論を、そんな馬鹿なことがあるものかと言って嘲笑的に論駁したものである。

この議論では、我々の尊敬する周公も孔子も曾参も、皆、親の名を忌まなかったという事実があることを取り上げて、現在の宦官や宮妾たちの間では忌み名の習慣があるからといって、これら聖賢たちが問題にしなかったことを問題にするのは、聖賢よりも宦官宮妾の方がえらいと、あなたがたは思っているのですか——と言って、文を閉じている。その結尾の文は次のようになっている。

夫周公孔子曾参卒不可勝。勝周公孔子曾参乃比於宦官宮妾。則是宦官宮妾之孝於其親賢於周公孔子曾参者邪。(夫レ、周公・孔子・曾参ニハ卒ニ勝ルベカラズ。周公・孔子・曾参ニ勝リテ、乃チ、宦官・宮妾ニ比ス。則チ是レ、宦官宮妾ノ其ノ親ニ孝ナルコト、周公・孔子・曾参ヨリモ勝レルモノナルカ。)

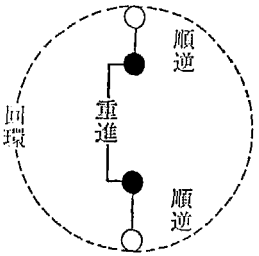
この「宦官宮妾」の部分に「重進回環」なる傍注がついて、文法の解説が図入りで懇切になされている。ある言葉を、一つの文の文頭に近い所に提出するのを「順」の提出と呼び、文末近くに提出するのを「逆」の提出と呼ぶことを心得て、細田氏の解説を見よう。

則ノ字ヨリ以上ハ周公孔子曾参ヲ順ニ出ダシ宦官宮妾ヲ逆ニ出ダス。則ノ字ヨリ以下ハ宦官宮妾ノ逆ヲ変ジテ順ニ出ダシ、周公孔子曾参ノ順ヲ変ジテ逆ニ出ダス。即チ宦官宮妾ハ重進ニシテ周公孔子曾参ハ回環ナリ。

と、くどいくらいに親切な説明である。さらに「周公孔子曾参」を○で表し、「宦官宮妾」を●で表して、次のような図にまでして示してある。そして、

都テ同字同語ヲ重複スルトキニハ、此ノ変化ナカル可カラズ。此ノ変化ヲ悟レバ愈々重複シテ愈妙ナリ。名家ノ文、一読人目ヲ眩シ、摸捉ス可ラザ

ルガ如キモノハ、多ク此レ等ノ処ニ在リ。初学ノ士刮目深思、以テ自得ス可シ。



と教える。「重進回環」の意味は、これで全く明らかであろう。

A——B。B——A

と、一つの語句 (B) を重ねるだけでなく、そこを回転の軸にして、相手の語句(A) に再び立ち戻るのがこの筆法なのである。

だから、「雑説一」の冒頭が

竜嘘気成雲。雲固弗霊於竜也。

となっていることは、そこに既に重進回環があるわけである。こうなると、まさに文章の音調上のリズムの問題である。訓読では、この味はわかるまい。

4 頂針回環の効果

明治の前半、巷間にあって、文章教育に精力的に働いたと見受けられる人に、岡三慶という人がいる。「文法」をめぐって、かなりの数の著作を残した。その『文法学講義』(明治24年、益友社) にも「頂針廻環」の記述がある。この人の文章は実に愉快なので、少しく引いて見よう。

諸君モ亦球突場ニ遊ハスヤ。夫ノ球ニ善ク廻転(クルル)〳〵循環(マワ)ルノ性ヲ有スルヤ、棒ヲ以テ之ヲ突ケハ、則チ廻転(クルル)〳〵循環(マワ)ツテ善ク台ノ上ヲ走ル者ナリ。針ヲ以テ円珠ヲ突クモ亦然リ。期ク針ニテ円珠ノ頂ヲ突テ廻転(クルル)〳〵循環(マワ)ル作用ヲ、昔人称シ頂針廻環ノ妙ト云ヒ、因テ頂針廻環ト云フ語ヲ以テ、物ノ痕跡無キヲ評スルノ言ト為セリ。何故ニ頂針廻環ナル語ヲ以テ物ノ痕無キヲ評スルノ言(コトハ)ト為セシヤト云ヘハ、夫ノ針ニテ其頂上ヲ突テクル〳〵マワリシ円珠ニハ、針ノ痕有ルカト疑ヒ、之ヲ手ニ執テ検視スルニ、毫ノ痕ヲ見サルニ依テナリ。是ニ於テ文章家モ亦頂針廻環ナル語ヲ以テ、文ノ接続ノ所及ヒ転換ノ所等ニ於テ、毫末モ接転ノ痕跡無キ様ニ書ク手法ノ称呼ト為セリ。然ル所以ノ者ハ、其転接に毫痕ヲ見サルハ、恰モ其頂ヲ突カシテ循環(マワ)リシ円珠ニ針痕無キト一般ナレハナリ。

然ラハ頂針廻環法トハ、文章ノ何如ナル者ヲ指スヤト云ヘハ、其転換ノ句ト接続ノ句トヲ問ハス、凡ソ上句ノ句尾ニ在ル所ノ字ヲ執リ、其次句ノ句頭ニ冒ラセテ句ヲ成ス法ヲ、呼テ頂針廻環法ト旦フ。唯是レノミナラス、上句中ニ在ル所ノ字ヲ執リ、因テ或ハ其次句ノ句頭ニ冒ラセ、或ハ其次句

ノ句中ニ置テ句ヲ成スモ、亦頂針廻環ト謂フ。

と。ここで注意すべきは、前文末と後文頭とで語を重複させる尻取りの定型のほかに、後文の内部に入って繰り返すものをも頂針回環に入れていることである。さらにもう一段落だけ引用すると、

然ラハ斯クシテ句ヲ成セハ、乃チ何ノ妙有ルヤト云ヘハ、則チ其文ノ語路カ円滑ト為リ、其音調カ円朗ト成ルヤ、恰モ夫ノ球カ突カレテ盤上ヲ走リ循環ルカ如キナリ。唯是ノミナラス、接続シテモ、転換シテモ、読ム者カ其接続其転換ヲ覚ラサルノ妙有リ。夫レ是ヲ以テ昔カラ能文ノ士カ好テ此法ヲ用ヒ、読者ヲシテ其接転ヲ覚ラサラシムル様ニ巧ミニ文ヲ行ルコトヲ謀レリ。

と述べている。ここでは、頂針回環法の心理的効用を言っているわけで、読み手は、これによると、気づかぬうちに、筆者の筆に乗せられて、筆者の目指す所に連れて行かれることになるらしい。最初に紹介した結城氏の『文章叢話』が

文章ハ歩ヲ踏ムトキハ、進ムニ苦労ナクシテ文調ノ円活ナルモノナリ。

と述べていたのも、同じことを指摘したものであろう。「歩ヲ踏ム」とは足踏みをすること，すなわち、同語を反復することである。

岡氏のこのくだりでの例文は、みな、山陽の『日本外史』から引かれている。

① 平氏出自桓武天皇。天皇夫人多治比真宗生四子。(平氏ハ桓武天皇ヨリ出ヅ。天皇ノ夫人、多治比真宗四子ヲ生ム。)

② 発兵討将門。将門聞之。率兵索貞盛於常陸(兵ヲ発シテ将門ヲ討ツ。将門之ヲ聞キ、兵ヲ率イテ貞盛ヲ常陸ニ索ム。)

③ 是為高倉帝。帝母之兄大納言時忠謂衆曰。方今天下之人、非平族者非人也。(是ヲ高倉帝トナス。帝ノ母ノ兄、大納言時忠、衆ニ謂ッテ曰ク。「方今、天下ノ人、平族ニ非ル者ハ人ニ非ルナリ」ト。)

④ 重衡等凱旋。献首闕下。清盛賞忠綱清盛常愛福原。又築島其南。(重衡等凱旋シ、首ヲ闕下ニ献ズ。清盛、忠綱ヲ賞ス。清盛常ニ福原ヲ愛シ、又島ヲ其ノ南ニ築ク。

⑤ 京師戒厳。時天慶二年也。三年朝廷拝参議藤原忠文為征東大将軍。(京師戒厳ス。時ニ天慶二年ナリ。三年、朝廷参議藤原忠文ヲ拝シテ征東大将軍トナス。)

これらの例文の解説において、岡氏は、なかなか含蓄のあることを言っている。

①では「天皇」の2字を頂針して、上句から下句へ回環しているという。こ

こで「句」というのは、今私たちのいう「文」(sentence) のことで、「天皇」の1語が1文から1文への渡りになっているということである。

② では「将門ノ二字ヲ頂針シ上ノ小節カラ下ノ小節ニ廻環ス」と説明する。今度は、句から句へでなく、小節から小節へ回環するというところが注意を要する。このくだりは、⑤ の例文に続く所なのだが、このあたりを、池辺義象氏の『邦文日本外史』によって示すと、次のようになっている。

> 三年、朝廷参議藤原忠文を拝して、征東大将軍と為し、諸将を率いて東伐せしむ。東海、東山の兵を発し、募るに重賞を以てす。而して貞盛を常陸掾に任じ、兵を発して将門を討たしむ。将門之を聞きて、兵を率いて貞盛を常陸に索むれども得ず。乃ち其の衆を散じて独り千余人を以て下野に至る。

このように漢文を訓読して、書き下し文にすると、原漢文では、対等に各1文をなしていたものが、書き下し文では、1文とは扱えず、用言の連用形で中止させて、読点でつないで行くことになる場合が、数多く発生する。(例えば、冒頭から「東伐せしむ」まで。また、「東海、東山」から「討たしむ」まで。) そのようにしてつながったひとつながりは、書き下し文という名の日本文では1文であるが、もとの漢文では、いくつかの文の集まりであったわけである。こういうひとかたまりを、岡氏は「小節」と呼んだものと思う。こうして、書き下し文で見ると、ここで、「将門」の1語が「小節」から「小節」への渡りに使われていることがわかるであろう。

③ の例では、「帝」の1字を頂針して「上段」から「下段」へ回環しているという。これも、ここに引用された範囲では、この「帝」による渡りが、「節」より大きい単位である「段」について、段から段へわたってなされている次第が理解しにくいであろうから、これも、池辺氏の訓読文で文脈を示す。

> 三年二月、憲仁(のりひと)、禅(ゆず)りを受く。甫(はじ)めて五歳なり。是を高倉帝とす。帝の母の兄、大納言時忠、衆に謂ひて曰く、「方今天下の人、平族に非ざる者は、人に非ざるなり。」と。

このひとくだりを、岡氏は「高倉帝とす」までと、それからあとと、二つの段落に分れると理解したのであろう。この理解には同調できる。そうすると、「帝」の1字が「段」から「段」への渡りを作っているとする見方に意味のあることがわかるであろう。そして、岡氏は、このように、上段から下段へ回環するのが、頂針回環の最上の用法だと評するのである。

④ では、「清盛」が前文で文末には位置していないが、これも頂針回環の一

種だと説明する。

⑤の例には、一つの飛躍がある。天慶二年の「二年」が、下段では「三年」で受けつがれたと見、これも頂針回環の一法だととらえている。

このように、岡氏が頂針回環の原理を広くとらえ、実際の文脈の中で、その応用的変異形を見出して評価したことを、私は甚だ興味を以て見るのである。

因みに、岡三慶という人は、頼山陽の門人であった森田節斉から教えを受けたと、他の書(『文章軌範文法明弁』明治13年)の自序に述べている。

5　頂針回環の拡大解釈

これまで述べて来たところでは、頂針回環の原理が、1文から1文へ、1語が橋渡しするという形に現れているものが多かった。これらの例だけから判断すれば、頂針回環などというのは、小手先のつまらぬ技法と見えるかも知れないが、これは、説明のしやすさから、そのような例が指摘されがちだというまでで、この原理は、もっと大きな単位でも働くのである。

私が便利に教えを受けている一書に、『中等教育習文教科書』(下森子来、内藤信敏編、明治26年、松栄堂)というものがある。前編が文範で、後編が「作文規縄、文法指針」となっている。この「指針」の中にも、頂針回環のことが述べてある。ここでの指摘は、大分、他の書の場合と趣きがちがっていて、1文章全体にわたる叙述の展開のしかたに、この法の適用を見ている。

『周礼考工記』から、次の文章が引かれている。(私は初めこの書を知らなかったが、向島成美氏の教示で知ることを得、確かめることができた。感謝にたえない。)5箇の黒丸は、頼山陽の評語に伴う彼の段落分けを示す。

- 天有時。地有気。材有美。工有巧。合此四者。然後可以為良。材美工巧。然而不良。則不時。不得地気。
- 橋踰淮而北為枳。鸜鵒不踰済。貉踰汶則死。此地気然也。
- 鄭之刀。宋之斤。魯之削。呉粤之劒。遷乎其地而弗得為良。地気然也。
- 燕之角。荆之幹。妫胡之笴。呉粤之金錫。此材之美也。
- 天有時以生。有時以殺。草木有時以生。有時以死。石有時以泐。水有時以凝。有時以沢。此天時也。

私のおぼつかない読みでは、大体、次のような趣旨と解される。

天には時の力があり、地には気の力がある。材には質の美が大事で、人の工には巧が必要だ。天時・地気・材美・工巧の四条件がそろって、始めて「良」ということがいえる。材は美で、工は巧でも、良でないことがあ

る。それは、天の時、地の気が得られていない場合である。

植物でいえば、淮河を越えて北へ行くと、橘は無くなって枳となる。鳥では、鸜鵒は済を越えられず、獣では、貉は汶を越えては生きられない。これらは、地の気がそうさせるのである。

人間の造る物では、鄭の国の刀、宋の国の斤、魯の国の削、呉粤の国の劒、これらはいずれも、各自の土地になければ良であり得ない。

また、燕、荆、妢胡、呉粤の各地に産する角、幹、笴、金錫は、みなそれぞれの土地において、材の美を保っている。

天の時が、生かすときもあり、殺すときもある。それに従って、草木は生きるときもあり、死ぬときもある。石も分解するときがあるし、水は凍るときもあり、豊かにうるおうときもある。これらはすべて、天の時がそうさせるのである。

この文章を、山陽が、こう言って評しているという。

不得地気也ノ句ヲ粘シテ先ツ地気ヲ叙シ、両段ノ波瀾ヲ為ス。

これは、第1段落のあとに記され、「両段」とは、後続の2段落を指すものと思われる。すなわち、「天時」で始まった叙述が「地気」で受け止められ、その地気をめぐって、後続2段で、具体的な、波瀾に豊んだ叙述がなされるということであろう。その2段のあとでは、

其後ニ金錫幹笴ヲ挿ミ、金錫幹笴ヨリ直ニ草木水石ニ接ス。

と述べられる。そして、最後に、

草木水石ヨリ上文ノ天有時ノ句ニ応ズ。是レ古文ノ法ナリ。

と評される。

なにぶん、孫引きであるから、本当に的確なところは、とらえ得ていないかも知れないが、山陽は、この文章の展開を、天時に始まって天時に戻る、つまり回環されて完結する構成と見、そのための頂針の役をする語句を「地気」あるいは「呉粤之金錫」に見ているのであろうか。上来の、1文から1文への諸例のように単純ではないので、回環はわかるが、頂針の位置に明らかでない点がある。それに、山陽自身がこれを明瞭に、頂針回環の例としているのかどうか疑われる記述なのであるが、著者下森氏らの意図は、推することができる。

また、同じ著者らが、続けて

史記ノ衛青ガ単于ヲ撃ツノ条下ニ漢ヨリ叙シテ胡ニ入リ、胡ヨリ叙シテ漢ニ入ル、総ヘテ、力ヲ費サズ。是レ頂針回環法ナリ。

と述べているのは、この原理を、さらに大きな文章の単位に拡大して見ているもので、文章論的に、おもしろく、また、大事な指摘と、私には思われる。

漢文の修辞学では、着眼単位の大小によって、次の四つの水準を設けてい

る。

篇法――1作品全体の構成法
章法――部分的まとまりの中での技法
句法――文単位での修辞法
字法――用語の技法

「句」は前述の通り「文」の意味であり、「字」は、「辞」「詞」「語」などと通じて用い、単語のことである。それが、中国語なるがゆえに、同時に文字でもあるわけで、現在の私たちが「語」(ことば)と「字」(文字)とを、レベルのちがうものとして区別するようには、漢文の世界では区別しなかったようである。

篇法・章法・句法・字法を総称して文法という。頂針回環は、句から句への渡りに関する文法であるから、句間文法(すなわち文間文法)というべきであろう。それが、さらに上位の文法になって、章法ともなり、篇法ともなる性質をもっていることを見たのである。

6 字眼と伏筆

漢文の文章では、眼目ということを大事にする。1篇の文章の論旨がある一点をめぐって展開する場合、その一点を眼目という。文章の眼目を短い1語で表すものがあれば、その1語を字眼という。次のページに示す韓愈の「送孟東野序」では、その中で、「鳴」の1字が極めて明瞭な字眼となっている。

「鳴」は、ここでは、じっとしていられずに音を発することを意味し、それが「不平」という状態のもたらす結果であることを言っている。その鳴には、風で発する草木の声、打って発する金石の声など、いろいろあるが、人が物を言ったり歌ったりするのも、心に抑え得ないものがあることの表れである。鳴には、選ばれて良い音を出す(善く鳴る)ものがある。天が選んで天の声の代弁をさせるものは善鳴の最たるもので、春夏秋冬を鳴って聞かせる鳥雷虫風も然り、時代を代表して人語の粋を残す詩文の雄たちもまた然り。社会の木鐸として鳴った孔子の声は、特に大きくて消えないものである。孔子以後、時代が下るとともに鳴りの質が、残念ながら低下して来た。それでも、当代には、李白・杜甫のように鳴りの善い人もいる。

孟東野君。君は今、世の中であんまり上の方にはいないが、君の詩の鳴り具合は第一級のものだ。出世して社会に大声を響かせるのも、みじめな生活から

悲痛な声を世に残すのも、どちらも、天が決めてそうさせる結果なのだから、君がこれから、社会の上に在って喜びの声を発するにしても、社会の下に在って悲しみの声を発するにしても、結局は同じことなのだよ。今、君は江南の地の任におもむくに当って、心楽しく行くわけではないようだが、要は、天の命によって鳴るあるのみと、私は言う。

大体、こんな流れの文章である。全文628字の中で、39回「鳴」の字が登場する。これに二重下線を付して示す。鳴を引き起す「不平」の字には細い一本下線を、鳴の質をいう「善」には太い一本下線を付す。そしてもう1字、「天」の字に注目するため、これをゴシック活字で示すことにする。

送孟東野序

大凡物不得其平則鳴。草木之無声。風撓之鳴。水之無声。風蕩之鳴。其躍也或激之。其趨也或梗之。其沸也或炙之。金石之無声。或擊之鳴。人之於言也亦然。有不得已者而後言。其歌也有思。其哭也有懐。凡出乎口而為声者。其皆有弗平者乎。樂也者。鬱于中而泄于外者也。択其善鳴者。而仮之鳴。金石糸竹。匏土革木八者。物之善鳴者也。維天之於時也亦然。択其善鳴者。而仮之鳴。是故。以鳥鳴春。以雷鳴夏。以虫鳴秋。以風鳴冬。四時之相推敓。其必有不得其平者乎。其於人也亦然。人声之精者為言。文辞之於言。又其精也。尤択其善鳴者。而仮之鳴。其在唐虞。咎陶禹其善鳴者也。而仮以鳴。夔弗能以文辞鳴。又自仮於韶以鳴。夏之時。五子以其歌鳴。伊尹鳴殷。周公鳴周。凡載於詩書六芸。皆鳴之言者也。周之衰。孔子之徒鳴之其声大而遠。伝日。天将以夫子為木鐸。其弗信矣乎。其末也。荘周以其荒唐之辞鳴。楚大国也。其亡也。以屈原鳴。臧孫辰。孟軻。荀卿。以道鳴者也。楊朱。墨翟。管夷吾。晏嬰。老聃。申不害。韓非。慎到。田駢。鄒衍。尸佼。孫武。張儀。蘇秦之属。皆以其術鳴。秦之興。李斯鳴之。漢之時。司馬遷。相如。揚雄。最其善鳴者也。其下魏晋氏。鳴者不及於古。然亦未嘗絶也。就其善鳴。其声清以浮。其節数以急。其辞淫以哀。其志弛以肆。其為言也。乱雑而無章。将天醜其徳。莫之顧邪。何為乎不鳴其善鳴者也。唐之有天下。陳子昂。蘇源明。元結。李白。杜甫。李観。皆以其所能鳴。其存而在下者。孟郊東野始以其詩鳴。其高出魏晋。不懈而及於古。其他浸淫乎漢氏矣。従吾游者。李翺。張籍其尤也。三子者之鳴信善矣。抑不知天将和其声而使鳴国家之盛邪。抑将窮餓其身。思愁其心腸。而使自鳴其不幸邪。三子者之命。則懸乎天矣。其在上也。奚以喜。其在下也。奚以悲。東野之役於江南也。有若不釈然者。故吾道其命於天者。以解之。

一つの文章において、形式的な語ではなく、実質的意味をもったある単語が

目立って多く用いつれていれば、それは、その文章の主題に深く関連した語であると見て、まず間違いはない。この文章で、「鳴」の語が主題をささえる語すなわち字眼の一つであることは、数量的な面から見ても、明らかである。

この文章の前半三分の一においては、鳴と不平とが形影相伴っており、その部分の後半に、鳴に善がかぶさって善鳴となった語が頻出している。その語はまた、いずれも、下に「者」という語を伴って「善鳴者」という単語となって用いられている。

善鳴者がよく出始めるところに、新たに「天」という字が登場する。「不平」「鳴」「善鳴者」「天」という諸語の、相伴った出方から、

① 不平が鳴を生ずる。

② 鳴の中に、選ばれた善鳴者が生ずる。

③ 善鳴者の中にも、天の選んだ善鳴者がある。

というふうに議論の進んで行く様がわかる。

「天」が、孔子を選んで木鐸とするくだりに、天の2度目が登場する。天という言葉がこのあたりから極めて重要な位置に坐り、後半3分の1の中では、次第に間を縮めつつ4回使われ、それが最後のおさえになって、文章が終る。

鳴の内容には、「喜」的なものもあり、「悲」的なものもあるが、いずれにせよ、それが善鳴であるか否かを定めるものは、専ら天である。だから、結果が喜となるか悲となるかは、天にまかせて、君は、ひたすら善鳴者であれということを言うのがこのくだりであるから、ここに至って、天はすっかり眼目となったわけである。

結局、この文章は、

不平 → 鳴 → 善鳴 → 天

という順序で進んでいることがわかる。多くの評釈者が、この文章が「縦横」と言われる変幻自在さをもった名文であることを賞し、字眼としての「鳴」の働きを高く評価するとともに、「天」の字の用法をも、伏筆という筆法の好見本として推賞している。

この文章で天が最初に登場する時は、文の終末部におけるような重々しい存在としてではなく、春、鳥を鳴かせ、夏、雷を鳴らし、秋には虫を、冬には風を選んで天の声を響かせる、風物詩的なシテの顔を見せるのである。それが次第に人間社会でのことになり、各時代の聖賢を代弁者として働かせ、人間世界の明をも暗をも支配する権能者に天を据えて行く。天は最後にこの文章を締める要(かなめ)となる。

この天のような語の用い方を、伏筆とか伏線とか呼んでいる。あとになって重要な存在となるものを、はじめは、読者が気づかぬくらいに軽く出し、忘れたころに、また、ちらりと登場させ、その間隔を次第に短くして、ついに、舞台の中央で大活躍を演ずるに至るように持って行く筆法である。

この筆法には、伏筆・伏線のほかにも、「伏脈」「伏案」「埋伏」、また、「針線」「線索」など、様々の名がつけられている。「針」「線」「索」などの語が用いられるのは、それが離れ去らぬよう、文脈の中に、糸で縫い付けていくという気持を表しているのである。和語を用いて「縫い付け」ともいうそうである。また、「草蛇灰線」という変ったことばも用いられる。草むらの中を蛇がはって行くように、また、火鉢の灰に火ばしですじを書いたときのように、ある筋が見え隠れに続いて行く様を言うわけである。

「孟東野」の文章では、字眼と伏筆の働きを見た。字眼は、多くの場合、最初からはっきりかかげて、また、機会あるごとに注意を喚起して、読者に理解の中心目標を明白に示そうとするものである。これに反して、伏筆は、ある時期までは目立たぬように、そしらぬ様で示しておき、読者に、気づかぬうちに理解の素地を作らせようとするものである。そこに、明示性と暗示性とのちがいがあるが、ともに、読者や聞き手の頭の中に、あることについての途切れぬつながりを作って行くための筆法である。

字眼にしても、伏筆にしても、修辞法の教えである以上、極めて意図的なものであり、習得すべき技術の目標としてかかげられるのであるが、修辞法を念頭に置く置かないにかかわらず、文章の中には、字眼的な存在や伏筆的な脈絡が発生するのが普通である。

文章中の各文が、先行文脈からの受けつぎ体制を作るために、どのような承前の姿勢を与えられるか、そこにどういうシステムがあるか、また、後続者に受けつがせる始発の姿勢はどのように作られるか、承前性と始発性を併せもつ転換性は、文のどういう姿として現れるか——これが筆者の課題とするところであり、これは、文章論の課題の一つをなすと思っている。字眼も伏筆も頂針回環も、みな、文の姿勢にかかわる問題である。修辞学と文章論とが容易に分れがたいゆえんがこのあたりにある。

7 Dickens の冒頭文に見る修辞

修辞法としての文法は、syntax としての文法に比べると、はるかに univer-

sal な性格をもっている。漢文の修辞法は、ほとんどそのまま日本語文の修辞法としても通用して来た。それと同じように、東洋の修辞学と西洋の修辞学とにも、共通するところが多い。

次に示す英文は、Dickens の長編小説 Bleak House の冒頭部、すなわち、その第1章、In Chancery の最初から四つの段落を記したものである。

私が2種類の下線を引いた語句にご注目願いたい。

① LONDON. Michaelmas Term lately over, and the Lord Chancellor sitting in Lincoln's Inn Hall. Implacable November weather. As much mud in the streets, as if the waters had but newly retired from the face of the earth, and it would not be wonderful to meet a Megalosaurus, forty feet long or so, waddling like an elephantine lizard up Holborn Hill. Smoke lowering down from chimney-pots, making a soft, black drizzle, with flakes of soot in it as big as full-grown snowflakes—gone into mourning, one might imagine, for the death of the sun. Dogs, undistinguishable in mire. Horses, scarcely better; splashed to their very blinkers. Foot passengers, jostling one another's umbrellas, in a general infection of ill-temper, and losing their foothold at street corners, where tens of thousands of other foot passengers have been slipping and sliding since the day broke (if the day ever broke), adding new deposits to the crust upon crust of mud, sticking at those points tenaciously to the pavement, and accumulating at compound interest.

② Fog everywhere. Fog up the river, where it flows among green aits and meadows; fog down the river, where it rolls defiled among the tiers of shipping, and the waterside pollutions of a great (and dirty) city. Fog on the Essex marshes, fog on the Kentish heights. Fog creeping into the cabooses of collier-brigs; fog lying out on the yards, and hovering in the rigging of great ships; fog drooping on the gunwales of barges and small boats. Fog in the eyes and throats of ancient Greenwich pensioners, wheezing by the firesides of their wards; fog in the stem and bowl of the afternoon pipe of the wrathful skipper, down in his close cabin; fog cruelly pinching the toes and fingers of his shivering little prentice boy on deck. Chance people on the bridges peeping over the parapets into a nether sky of fog, with fog all round them, as if they were up in a balloon, and hanging in the misty clouds.

③ Gas looming through the fog in divers places in the streets, much

as the sun may, from the spongy fields, be seen to loom by husbandman and ploughboy. Most of the shops lighted two hours before their time—as the gas seems to know, for it has a haggard and unwilling look.

④ The raw afternoon is rawest, and the dense fog is densest, and the muddy streets are muddiest, near that leaden-headed old obstruction, appropriate ornament for the threshold of a leaden-headed old corporation—Temple Bar. And hard by Temple Bar, in Lincoln's Inn Hall, at the very heart of the fog, sits the Lord High Chancellor in his High Court of Chancery.

第1段落のはじめと第4段落の終りとに、the Lord Chancellor (大法官)及び彼の居所である Lincoln's Inn Hall の名が見えている。そして、その提出順序が逆になっている。漢文の文法でいえば、まさに「順逆」が逆転しており、頂針回環を思わせる。

「大法官がリンカーン・イン・ホールに」と言って始まった叙述が、そのホールを取り囲むロンドンの霧の叙述の後に、今度は、「リンカーン・イン・ホールに、この霧の真っただ中に、われらの大法官殿がいる」と言って回環しているのである。

それを回環させる頂針として、第2段落の fog が大活躍している。

この段落には、fog が13回登場する。まことに「字眼」というべきである。この段落を読んで fog を印象づけられない読者はいないだろう。

ここで、fog の用法の何と修辞的であることか。

まず、Fog everywhere. と言って総括的にとらえ、あと、everywhere を分割して述べて行く。その分割のしかたは、また、漢文の得意とする対句の手法によっている。

Fog up the river, where it...
fog down the river, where it...

Fog on the Essex marshes
fog on the Kentish Heights

Fog creeping into the...
fog lying out on the... and
hovering in the...
fog drooping on the...

Fog in the eyes and throats of...
fog in the stem and bowl of...

のように語形をそろえて、韻文的な調子を出したあと、読者を、橋の欄干から

下界をのぞく位置に連れ込んで、気球で雲の中をさまよう者とさせる。

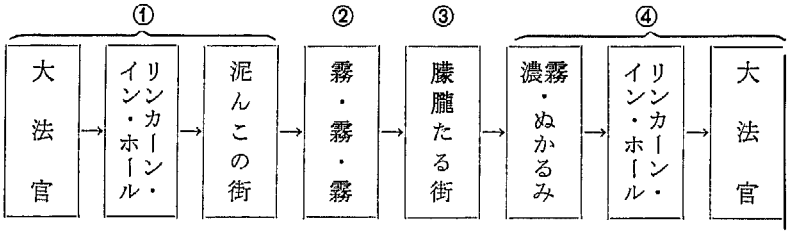
第2段落で、これだけたっぷりと霧を味わわせたあと、第3段落で、この霧のため、ふだんより2時間も早くガス燈をともす街の店々を描き、さて、第4段落では、また、

The raw afternoon is rawest,
the dense fog is densest,
the muddy streets are muddiest,

と、文型をそろえて、冷えに冷え、霧はいやが上にも厚く、街という街は、ただもう泥んこである——そんな中にある Temple Bar, その Temple Bar のすぐわきに、リンカーン・イン・ホールがあり、その中に大法官が...と持って行く。

この段落では、今述べたように、raw afternoon, dense fog, muddy streets と三つの状況が並ぶが、三番目の muddy streets の模様は、第一段落でくわしく描かれている。そこは、地球を水浸しにした大洪水がやっと今引いたばかりという感じで、そこを40フィートもある原始怪獣がうろついていてもおかしくない荒涼たる風景。犬も馬も人も、泥んこ以外の何物でもない有様である。

この冒頭4段落を通して、話題の流れは、次のようになっている。



こうして見ると、この文章展開が、fog を頂針にして、文字通り回環していることがわかるであろう。

文章の大筋の流れにおいて、そのような修辞性が見られるほか、部分的にも、いろいろな修辞法を見ることができる。その一つに、第1段落の中ごろに見えるもので、dogs, horses, foot passengers という3語句の重ね方に注目したい。dogs と horses とは、明らかに同一範疇に属する。そして、dogs から horses へと、人間に一段と近づく方向が感じられたあと、人間の歩行者にしばらく注意が行く。ここにおいて、文脈を進展させるのによい働きをする技法として、文間にわたる類義語の使用という方法が用いられていることを見る。

これも極めて一般普遍的原理で、言語の如何を問わず、近い文脈の中に、類義や類縁の語が使われやすいということは、すでに文章論上の一つの定説となっている。

Dickens は、小説の技巧を充分身につけた人であったろうから、作文に当っても、レトリックの効果を、大いに考えたことと思われる。漢文の修辞法も Dickens のレトリックも、もはや過去のものであって、今日の文章では効果を発揮できないものと、観念的には言えるかも知れない。しかし、実際はそうでないと私は思う。

8 思考のリズムと修辞法

直前を先行する文の中の言葉を後続の文が反復使用する傾向があるとか、その反復では、近くにあるものほど反復の効果が上がるとかいうことは、文章論の問題でもあり、修辞学の問題でもある。

次の文は、哲学者三木清氏の「仮説について」という文章の一部である。

> 思想が何であるかは、これを生活に対して考えてみると明瞭になるであろう。生活は事実である。どこまでも経験的なものである。それに対して思想には常に仮説的なところがある。仮説的なところのないような思想は思想とは言われないであろう。

第1文では、「思想——生活」という順序で、この2概念が提出されているが、第2文では「生活」だけが論じられ、第3文では「思想」が論じられる。すなわち、三つの文を通して、思想と生活とは、

思想——生活。生活——思想。

という順序で論じられているので、例の言い方をすれば、この文章は、「生活」を頂針(重進)して、「思想」を回環したということになる。

また、第3文で「思想——仮説的」と提出されたものが、第4文では「仮説的——思想」という順序になっている。ここでもまた、同じことが言えるわけである。

三木氏は、ここで、頂針回環という修辞法を用いて、こういう文章を書いたのであろうか。他人の頭の中のことは、わからないが、私の推測では、恐らく、そうではないだろう。三木氏は、修辞法として、こういう言い方をしたのではなく、考え方の順序がこうであり、自分の考えたことを他人にわかるように表すための順序もこうであったから、こういう言い方をしたのだろう。

文章は思想の内容を表現したものだというのが正確な言い方ではあろうが、むしろ、実際には、文章は思想そのものだと言った方が真実に近いかと思われる。

修辞法は思考法から出る。